

■鳥谷部春汀ジャーナリスト。人物評論の第一人者。周到な調査にもとづく公平な論評で高く評価されるも早世した。
とやべしゅんてい
薩摩藩士密航1865＝陸奥国三戸郡五戸町蛭川で、名を知られた劔客の南部藩士木村忠治の長男に生まれる。本名銃太郎。幼時より母りわの実家南部藩士鳥谷部氏を嗣ぐ。
明治維新・・・1868＝3歳：

明治6年政変1873＝8歳：開設された五戸小学校に入学。
佐賀の乱・・・1874＝9歳：

三つの反乱・1876＝11歳：奥羽巡幸に陪従の有栖川熾仁親王が臨校した際、優等生として歴史の一節を講じ、
西南戦争・・・1877＝12歳：首席で卒業後、五戸小学校で助教を勤めながら、田口鼎軒編の『経済學歴史』などで勉強。

琉球処分・・・1879＝14歳：五戸選抜生として青森専門学校農芸科に入る。
明治14年政変1881＝15歳：
新体詩抄・・・1882＝17歳：旧藩の先輩を頼り上京するも渡清していたため、京都を経て和歌山に至り、青森専門学校時代の教頭色川圀士を訪ね、借金を申込み渡支の決心を語るも、無謀を戒められて、再び東京に歸り独学。
岩倉具視没・1883＝18歳：
秩父事件・・・1884＝19歳：脚氣を病んで帰郷、快癒後、五戸小学校高等科四年の担任。

初の対等条約1888＝23歳：再び上京、東京専門学校(現早稲田大学)英語本科に入学。
帝国憲法発布1889＝24歳：
帝国議會始・1890＝25歳：英語普通科を卒業、
足尾鉍毒始・1891＝26歳：続いて政治科卒業。帰省して、政治運動するうち、岩手県に遊説に来た島田三郎を紹介され、
大本教・・・1892＝27歳：上京して、島田三郎の毎日新聞社に入社。
郡司千島探検1893＝28歳：南部藩の医師の次女で五戸小学校の教え子だった松尾ことと結婚、神田美土代町に家を構える。
日清戦争始・1894＝29歳：『東洋治安策』を刊行。島田三郎の紹介で近衛篤磨と始めて相識ると、退社し、
日清戦争終・1895＝30歳：東京専門学校時代の同窓大久保湖洲のあとを受けて、*近衛篤磨から機関誌(精神)の編集を託され、人物評{人物月旦}の執筆を始め、(明治評論)と改題後も続ける。
白馬会・・・1896＝31歳：『白根専一』『三新聞記者』『板垣退助』『個人としての伊藤侯と大隈伯』『新聞記者としての幅澤論吉翁』『山縣有朋』を発表。しばしば近衛公を訪ねるうち、入閣勧誘される。
八幡製鉄始・1897＝32歳：長女はるが誕生。『衆議院の三天才』『佐々友房』『島田三郎氏』『徳富猪一郎氏』『尾崎行雄氏』『大石正巳』を発表。この間、博文館に招かれて雑誌{太陽}の記者となり、同誌上でも{人物月旦}の執筆を続け、
子規句歌革新1898＝33歳：『田口卯吉氏』『井上馨伯』『末松謙澄男』『伊東巳代治男』『近衛篤磨公』『兄玉皇湾総督』『矢野文雄氏』『林有造氏』『青木周藏子』『東北の三代議士』『三井家』『現時の大隈伯』『伊藤侯の現在及未來』『星亨氏』『田中正造氏』『犬養毅氏』を発表。_それまで掲載の人物評論を集めて『明治人物評論』を博文館から刊行し、博文館の{通俗百科全書}第9編として『通俗政治汎論』を編述。
Bushidou・・・1899＝34歳：『山本権兵衛氏』『山縣侯の政治的系統』『自由黨憲政派の人物』『佳友家』『政治上に失敗したる二大新聞記者』『侯爵西郷従道君』『政界の二遊星』『東北の人物』『新聞社會の人物』『伯爵大木喬任』『薩摩の外交家』『星亨の自由党』『歸朝したる近衛公』を発表。博文館の{日用百科全書}第39編として『内地雜居 改正條約案内』を刊行。
ピアノ/国産化・1900＝35歳：長女はるが死去。『衆議院の院内総理』『石川舜台師』『北里博士』『澁澤榮一氏』『婦人社會の才媛』『政界の文學者』『立憲政友會の創立及び其創立者』『國務大臣封新聞記者孚件』と、_報知新聞社に転社後も、{太陽}に人物月旦發表し続け、それまでのものを集めた『続明治人物評論』を博文館から刊行。
田中正造直訴1901＝36歳：東邦協会常議員となる。『大學派の政治的系統』『貴族院の人物』『内閣書記官長』『失敗したる御用新聞記者』『日本の慈善教育家』『桂總理大臣』『日本基督教界の人物』『中江兆民居士』『副島蒼海先生』を発表。
教科書疑獄・1902＝37歳：『日本の女子教育家』『頭山滿氏』『雨宮敬次郎氏』『蕃幕の遺臣』『加藤高明氏』『徳川慶喜公』『田尻稻次郎氏』『逝ける西郷従道侯』『最近の板垣伯』『帰朝せる渡邊國武子』『早稲田大學の三講師』を発表。この間、_報知新聞社を退き、再び博文館に入社して{太陽}主幹となり、これらの人物月旦31篇を纏め『明治人物小観』を刊行。
日比谷公園・1903＝38歳：『現内閣の三人男』『當今の新聞記者』『議會の雄鼎家』『加藤文學博士』『露國大臣ウィッテ』『英國植民大臣チャムパーレン氏』を発表。金子堅太郎の紹介で伊藤博文に面会。
日露戦争始・1904＝39歳：『大山參謀本部総長』『活動せる河野廣中氏』『故近衛公を追憶す』『頑地櫻擬居士起つ』『濁逸現皇帝』『アレキシーフは何者ぞ』『故陸奥伯と小村男』『馬玉篋』『見玉男とクロバトキン』『嗚呼廣瀬中佐』『名將マカロフ』『衆議院の一名物逝く』『人民の代表者』『戦時の井上伯』『故近藤真琴翁を同憶す』『幕末の老外交家』『米國現大統領ルーズベルト氏』『クルーゲル逝く』を発表。
日露戦争終・1905＝40歳：『御用新聞主筆』『デニソン』『東郷海軍大將と英雄崇拜』『乃木將軍とステッセル將軍』『晩年の蒼海先生』『原内務大臣』『露國歴制家の標本』を発表。この間、_『時代人物月旦』を博文館から刊行。
満鉄発足・・・1906＝41歳：『犠牲となりし山川健次郎氏』『英國新内閣大臣』『桂伯と西園寺侯』『明治年間の才人』『伊藤系の二遊星』『西園寺侯と加藤高明氏』『古稀の板垣伯』『進歩黨の首領』『長岡雲海先生』『渥美契縁師』『久保田讓氏と牧野伸顯氏』『後藤新男爵』『新外務大臣林董子』『島田蕃根翁』『矢野次郎翁』『尾崎行雄氏の卒年』『韓國皇帝と伊藤統監』『帝國陸軍の恩人』『丙午十月人名録』『佛國新首相クレマンソー』『故否岡浩太郎氏』『一種の人格諸戸清六翁』を発表。この間、{文章世界}に『當今の時文家』『人物評論について』を寄稿し、{中央公論}のアンケート『夏期學生の読物』に意見を寄せる。
韓国反日暴動1907＝42歳：次女美代が誕生。『新聞『日本』を去りたる三宅博士』『不人望の犬養毅氏』『黨首を辞したる大隈伯』『河島新北海道長官』『尾崎市長と大岡市會議長』『將に來朝せむとする救世軍總督』『立見大將を同憶す』『盤界の豪傑』『大主教ニコライ』『袁世凱と琴春燈』『口碑上の豪傑』『後藤男爵と頭山滿』『故岸上質軒を異す』『將に歸朝せむとする山本男』『ジョルダン博士』『陸羯南』『北尾博士』『大隈伯と故陸奥伯』『軍警總監森林太郎氏』『川村伯と大木伯』。{文章世界}に『明治の翻譯家』『傳記と歴史』『文章雜感』を発表。刊行の(開國五十年史)に『新聞紙雜誌及び出版事業』を執筆。
アラビヤ創刊・1908＝43歳：『山縣公爵』『都筑馨六氏』『橋本査伯』『コッホ博士』『更迭せられたる外交官』『西園寺侯と桂侯』『入閣したる人、入閣せざる人』『タフト氏とブライアン氏』『井上侯の人格』『菊池京都大學総長』『小松原文部大臣』『病める榎本子爵』。{文章世界}に『現代の文章を讀め』を発表。{時文叢書}第三卷として『春汀文集』を{文章世界}に文館から刊行。この間、_久しぶりに帰省し、その機会に大町桂月、準幅百穂、長谷川天溪を十和田湖探勝に誘うも、天溪は子供の病氣で果さず、桂月、百穂と一緒に出掛けたが、二人を失望させることを恐れ、天下の名勝日光と比較すべく日光見物し、十和田湖の景色が決して劣っていないことを確かめた上での勧誘であった。胃腸病で同生病院に入院していたが、病勢一憂赤痢となり、没した。
翌年、口述筆記した最後の人物評論『大谷光瑞法主』を{太陽}に掲載。{春汀全集}第一卷として『明治人物月旦』、第二、三卷として『明治人物月旦』の続き及び{各種評論}が博文館から刊行された。森銃三は、春汀のことを『明治の硬派の文人の中でも最も敬意の表せられる人』と書いている。